

12世紀デヴォン伯家の「友人たち」

著者	有光 秀行
雑誌名	文化
巻	84
号	1,2
ページ	1-21
発行年	2020-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129703

文化 第84巻 第1・2号 一春・夏一 別刷
令和2年10月31日発行

12世紀デヴォン伯家の「友人たち」

有 光 秀 行

12 世紀デヴォン伯家の「友人たち」

有 光 秀 行

1. はじめに

本論文は、デヴォン伯の家門であるレドヴァズ家 the Redvers 関連の、12 世紀を中心とする証書 charters に着目し、その「ネイション・アドレス」、およびそれと関係の深い「友人たち amici(s)」について分析・考察する。

「ネイション・アドレス」について、筆者はすでにいくつかの論文で扱っている。その要点を簡単に確認しておくと、筆者はこのことばを、令状証書 writ-charter 形式の証書冒頭の挨拶（アドレス）で、発給者が挨拶する対象として「イングランド人（へ）Angli(s)」、「フランス人（へ）Franci(s)」など、民集団（ネイション）に言及する部分、として用いている。用例についてはこれまでの調査の中で、1066 年のノルマン・コンクエストの直後から、イングランド国王の発給する証書で使用されはじめ、12 世紀後半には用いられなくなっていくこと、イングランドの教会や貴族、またスコット人の王など、イングランド王と関わりの深い発給者の証書でも似たような趨勢で用いられたこと（例外もある）、などを確認している。さらにこの「アドレス」が、またその出現状況が何を意味しているかについては、別個の民集団意識とその融合化、利用する言語（英語、フランス語等）の区別などいくつかの考え方があり、今後の検討課題であるとしている（有光（2013）第 8 章～第 10 章（「ネイション・アドレス」考（1）、（2）、（3）））。

本論文はこのような研究の流れをふまえ、貴族の証書における「ネイション・アドレス」の用例を蓄積し、またその意味について考える試みである。

また一方で本論文は、その挨拶部分にやはり登場する「友人たち」にも注目する。証書と「友人たち」については、ジョン・メディンズによる先行研究がある（Meddings (2000)）。彼はこの論文で、さまざまな種類の史料にみられる「友人」「友情」を考察しているが、その中に証書の例への言及もある。ただそこでは、本論文で扱おうとするデヴォン伯家は扱われていない。また、メ

ディングズの研究では単にことばの使用例としてあげられているにすぎず、このことばが何らかの実質を持つのかそれとも文書形式上出てくるにすぎないのかを判断するためには、網羅的な研究が必要であると述べている (Meddings (2000), 191f.)。しかしそのような研究は、今日に至るまでなされていない。本論文はそうした網羅的研究ではないが、それに近づくための事例を積み重ねる試みでもある。

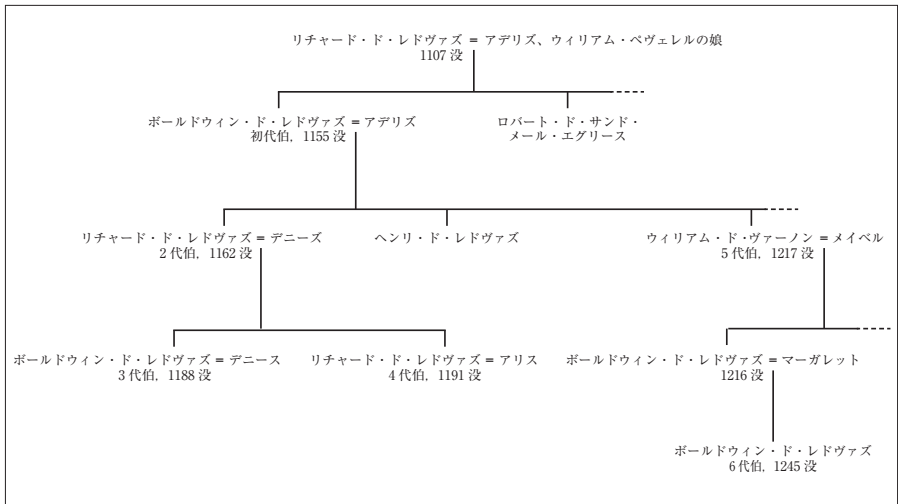
さらに本論文の背景には、デイヴィッド・ベイツによる問題提起がある (Bates (2013)、中村 (2015))。彼は「帝国」概念を用いてノルマン人の勢力圏を考察する意義を、古代や近代の諸帝国分析また社会科学の帝国分析の知見との対話により、研究の新生面をひらくことに求め、成功している。彼がもっとも強調していることのひとつは、構築主義的「帝国」観である。つまり、当時のエリート層の具体的な人生の軌跡に着目し、人々が、英仏海峡を越えてひろがる所領と人のつながり (ネットワーク) を形成し、保ち、また場合によってはそこから離れていく、そうした具体的事例を明らかにし、積み重ねていく中で描かれるネットワークから、「帝国」を理解することの重要性を指摘しているのである。こうしたネットワークが形づくられる要因としては、家系、結婚、主従関係などがある。そして「友人」関係も、ネットワークに深く関わっていた可能性があるのではないか。本論文はそのような広い文脈も意識しながら、考察をおこなうことにする。

2. デヴォン伯家 (レドヴァズ家) の概略 (Bearman (1994), 1-16 および Bearman(2004) による。また系図参照)

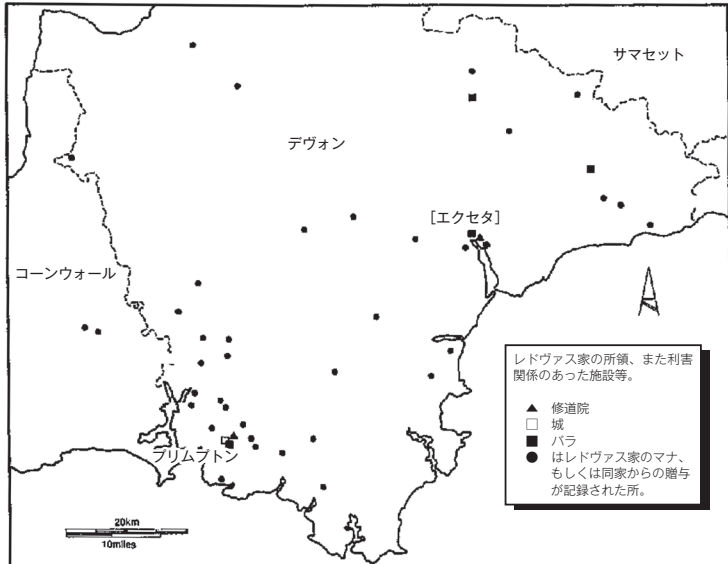
この家門はそもそも、ノルマンディ中部のルヴィエ Reviers 出身であるが、やがて西部のネウ Néhou および東部のヴェルノン Vernon を所領の中心とした。

リチャード・ド・レドヴァズ (1107 年没) は、ウィリアム 1 世征服王の末子ヘンリに献身的に仕え、1100 年にヘンリがイングランド王に即位したのち、カリスブルック所領群 (イングランド南部のワイト島)、クライストチャーチ所領群 (ワイト島の対岸、ドーセットおよびハムプシャー中心)、プリムプトン所領群 (イングランド西南部のデヴォンシャー中心) を獲得して、海峡を挟む大所領群を保有することになった (これらイングランドの所領群については、地図 1～3 を参照)。

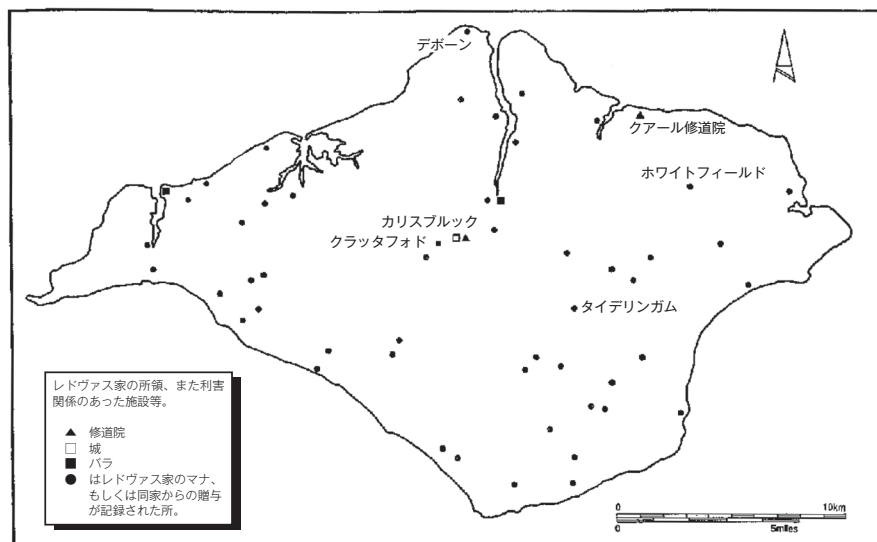
しかしその後、彼の子孫が国政でおおきな役割を果たすことはなかった。



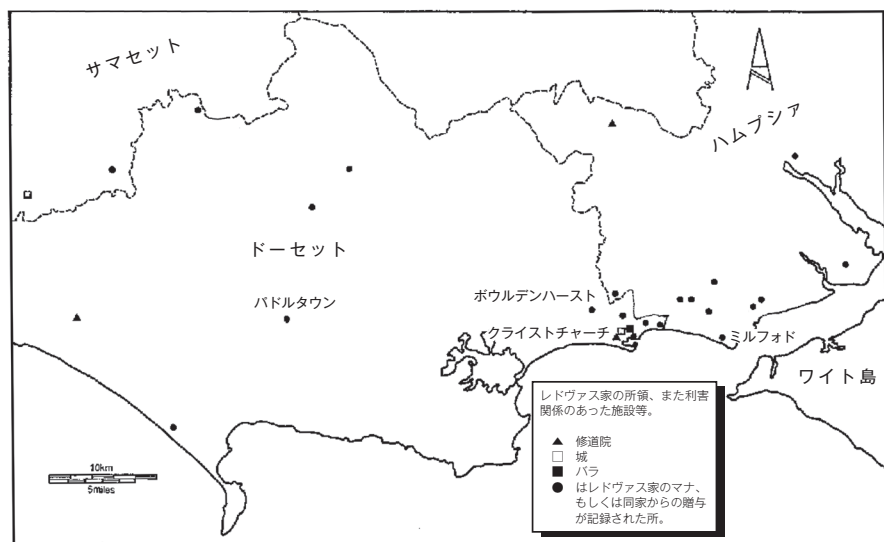
系図：レッドヴァズ家（本論登場人物を中心に）（Bearman (1994), Figure 1 にもとづく。）



地図 1：プリムプトン所領群（Bearman (1994), Map 1 にもとづく。）



地図 2：ホワイト島とカリスブルック所領群（Bearman (1994), Map 2 にもとづく。）



地図 3：クライストチャーチ所領群（Bearman (1994), Map 3 にもとづく。）

リチャード・ド・レドヴァズの没後、長子ボードウィンがイングランドの所領、次男のウィリアムが大陸の所領を相続した。他の息子たちの記録も主としてノルマンディに残っている。

ボードウィンは父リチャードが亡くなったとき、未成年であったようで、しばらくは国王宮廷で過ごしたらしい。しかし1120年代以降、彼はあまり国王のもとに姿を見せなくなり、父リチャードと違って王の重臣とはならなかった。またスティーヴン王の治世になると、ボードウィンはこの国王と対立して、1136年に、エクセタにある王城を入手した。しかしスティーヴン王が反撃すると、エクセタや、西部所領の中心地プリムプトンから離れて、ワイト島のカリスブルックを根城に、英仏海峡で海賊活動をおこなった。だが、さらにスティーヴン王に攻められてイングランドを去り、大陸のアンジュ伯ジョフロワの宮廷に逃れた。ジョフロワの配偶者は、イングランドの王位を要求する帝妃マティルダ（ヘンリ1世の娘）である。彼らの軍に加わってボードウィンはノルマンディ攻撃に参加し、1139年にはイングランドに再上陸した。ボードウィンがマティルダによってデヴォン伯とされたのは1141年、リンカンの戦いでスティーヴン王がとらわれた後である。しかしその後、マティルダの立場が弱体化すると、ボードウィンは彼女の側近ではなくなり、もっぱら自領での権力回復に努めた。

初代伯ボードウィンは1155年に没し、ワイト島のクアール修道院に葬られた。そして長子のリチャードが2代目の伯として後を継いだ。しかしその少し前に国王に即位したヘンリ2世は、イングランド西南部での王権回復をもくろみ、リチャードの伯領保有確認に時間をかけるなどして、彼との関係は薄かった。1162年にリチャードが没した後、幼い息子たちは母方の祖父であるコーンウォール伯の庇護下に入ったが、1175年に伯が没すると所領は王の管理下に置かれた。リチャードの遺児ボードウィンが所領を継ぐのは1179年、伯となるのはさらにその後であった（但しボードウィンの結婚への配慮などから見て、ボードウィンと国王ヘンリとの関係には暖かさがあった）。さらに1188年にボードウィンが没し、弟のリチャードが後を継いだ。そのすぐ後の1191年頃に亡くなった。

リチャードに息子がいなかったため、彼の後を継いだのは叔父であるウィリアム・ド・ヴァーノンであった。同時代の年代記での言及がほとんどみられないことから、彼は国政で役割を果たす能力もその気持ちもなかったとされる。

息子ボールドウィンに先立たれたウィリアムは、1217年に亡くなった。後を継いだのは1歳になって間もない孫のボールドウィンだが、ベアマンが編纂したデヴォン伯家の証書集（Bearman（1994））が伯ウィリアムの時代までを対象としているため、本節の記述もここで終えることにする。

このように、2代目伯リチャードとその相続人たちは、早世したり未成年時代が長かったりして、国事でも、またイングランド西南部においても影響力をあまり持てず、家門の中心地はワイト島にあった。

3. デヴォン伯家証書の名宛人

ベアマンが編纂したデヴォン伯家の証書集（Bearman（1994））を利用して、「ネイション・アドレス」のあるもの・ないもの、またこの「アドレス」を持つ形式でないものの数を、表に整理した（表参照）。

これを見ると、まず、「ネイション・アドレス」を持つものは13通あり、高い確率で存在するといえる。なおそれらはみな、「フランス人とイングランド人に Francis et Anglis」宛てたものである。

また、「アドレス」のほか、「友人たちに amicis」の文言を含むものも10通と、多い。そのうち「アドレス」も持つものが6通、「アドレス」はないものが4通で、数はほぼ同じと見てよいであろう。

(1) 「アドレス」のある証書

表にあるように、「アドレス」のある証書は、初代伯ボールドウィン（1107-1155年）関連が4通（「アドレス」の入りうる全証書中約44パーセント）、2代伯リチャード（1155-1162年）関連が7通（約64パーセント）、4代伯リチャード（1188-1191年頃）関連が1通（50パーセント）、5代伯ウィリアム・ド・ヴァーノン（1191頃-1217年）関連が1通（20パーセント）である。

以下、歴代伯の証書を具体的に紹介する。まずベアマンの証書集の番号、発給（推定）年、オリジナルかカーチュラリ（証書記録帳）収録の写しか、をあげる。つぎに名宛て人を列挙し、証書の内容を要約し、証人をあげる。証人は特に、「アドレス」を考えるヒントになるかもしれないと考え、列挙する。最後に補足事項や所見などを付け加える。ボールドウィン以降についても、これらの点に注目する。記載する事項は、基本的に Bearman（1994）に依拠している。

	「アドレス」入りうる証書の数		入り得ない 証書の数
	「アドレス」なし	あり	
リチャード・ド・レドヴァズ、1107 没	0	0	5
アデリズ、リチャードの妻、1160 頃没	1	0	5
ボールドウィン・ド・レドヴァズ、初代伯、1155 没	5 (14, <u>20</u> , 28, 29, 31)	4	15
ルーシ、初代伯ボールドウィンの 2 人目の配偶者	0	0	1
リチャード・ド・レドヴァズ、2 代伯、1162 没	4	7 (39, 44, 45, <u>48</u> , <u>51</u> , <u>52</u> , <u>53</u>)	6
ボールドウィン・ド・レドヴァズ、3 代伯、1188 没	1	0	7
リチャード・ド・レドヴァズ、4 代伯、1191 頃没	1	1 (<u>62</u>)	3
ウィリアム・ド・ヴァーノン、5 代伯、1217 没	4 (<u>73</u> , 74, 100, <u>107</u>)	1 (<u>68</u>)	38
ハーワイズ・ド・レドヴァズ 1 世、リチャード・ド・レドヴァズの娘	1	0	0
ハーワイズ・ド・レドヴァズ 2 世、初代伯ボールドウィンの娘	3 (110, <u>111</u> , 120)	0	7
マージェリ・ド・ヴァーノン、リチャード・ド・レドヴァズのひ孫	0	0	5

表：レドヴァズ家証書の、「アドレス」と「友人たち」による分類

*カッコの中は Bearman(1994) の証書の番号。下線を付したものには「友人たち」がある。

初代伯ボールドウィンの 4 通は、以下の内容である。

- No.15. 1139 年夏から 1141 年 6 月（伯になる前）。14 世紀の写し。
（名宛て人）フランス人やイングランド人であるすべての彼（ボールドウィン）の家臣、そして将来この書き物が届くだろうキリストに忠実なすべての者たち。

(内容) クライストチャーチ教会の参事会長および参事会員たちの財産確認。

(証人) ヒューバート・ド・ヴォ Vaux、スティーヴン・ド・マンデヴィル Mandeville、ジェフリ・ド・フォルネルズ Fornels、ジョルダン・ド・レストル Lestre、ラドルフ・ド・カドモ Cadomo、ジラルモ・ド・ヴァーノン、ウィリアム・ド・ジェメギス Gemegis、リチャード・ド・アンガヴィル Angerville、ウィリアム・ド・モーヴィル Moreville、ロバート・ド・サウシ Saucei、ウィリアム・ド・ヘリオン Helion、ヒュー・ペヴェレル Peverel、ジェフリ・ド・スピネト Spineto、ヒュー・ド・ウィンデルショウ Windelshore、ウォールタ・フィッツ・ラドルフ、その兄弟ロバート、ロバート・フィッツ・ペイガン、その兄弟テオドリック、ヒュー・ジェルノン、その他大勢。

(補足・確認など)

まず、ここで財産確認をされているクライストチャーチ教会について、紹介する。

クライストチャーチは、エドワード証聖王時代に 24 人の参事会員を持つ参事会教会 collegiate church であった。ヘンリ 1 世はこの教会とマナをリチャード・ド・レドヴァズに与えた。1150 年に参事会長の請願を受け、この教会はアウグスティヌス会則を導入して修道院となった (Knowles and Hadcock (1971), 114)。

この証書で確認されている所領などは、今日のハンプシャー、ドーセット、そしてワイト島にある。

証人のヒューバート・ド・ヴォは伯ボールドウィンによく付き添っていた人物である。マンデヴィル、フォルネルズ、ヘリオン、ペヴェレルはレドヴァズ家のプリムプトン所領群に、モーヴィルはワイト島に所領を有していた家門である (Bearman (1981))。またペヴェレル家はレドヴァズ家の縁者でもある (初代伯の母がペヴェレル家の出身、系図参照)。

- No.21. 1141 年 6 月から 1155 年 6 月。17 世紀の写し。

(名宛て人) 彼 (伯) の、フランス人やイングランド人である直属封臣、家臣。

(内容) クワール修道院 (ワイト島) への寄進の告知。

(証人) リチャード・ド・レドヴァズ、ジェフリ・ド・フォルネルズ、ジョルダン・ド・レストル、サムスン・フォリオット Foliot、ヒュー・ペヴェ

レル、ブライアン・ド・インスラ Insula、ジェフリ・ド・スピネット、司祭 capellanus ニコラス。

(補足・確認など)

寄進されているのは「スウェインおよび彼がクライストチャーチの製粉所の隣に保有している住居」と、「ハウルデンハーストの製粉所の隣の5 シリングの土地と、それを保有するブリストウィン（人名）をともに」であり、土地は両方ドーセットに位置している。

フォルネルズ、ペヴェレルはプリムプトン所領群、フォリオットはプリムプトンおよびクライストチャーチ所領群、インスラはワイト島に所領を持つ家門である (Bearman (1981))。「インスラ」は島を意味するラテン語。

- No.32. 1151年から1155年6月。カリスブルック修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 島の州長官、島のすべての直属封臣、フランス人であれイングランド人であれ。

(内容) ラルフ・バシュリへの財産下賜告知。

(証人) 伯妃ルーシ、その他大勢。

(補足・確認など)

下賜されたのは「カリスブルック城の南の1 dena (エーカ? ベアマンによる推測)、クラッタフォードの司祭 presbyter ハンフリの家の上から (? desuper) 5 エーカ、リチャード・フィッツ・サフゲルが保有するホルドリの土地」で、すべてワイト島にある。ルーシはボールドウィンの2番目の配偶者。

- No.33. 1151年から1155年6月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 彼 (伯) の主人 dominus ウィンチェスタ司教ヘンリ (ド・プロワ)、すべての彼の、フランス人やイングランド人である直属封臣、家臣。

(内容) クライストチャーチ教会参事会員たちの財産確認。

(証人) 伯妃ルーシ、ヘンリ・ド・レドヴァズ、彼の兄弟ウィリアム、その他大勢。

(補足・確認など)

ドーセットやハンプシャー、そしてワイト島の土地が列挙されている。ボールドウィンと「息子で相続人」リチャードの連名で出されている。

2代伯リチャード時代の7通は、以下の内容である。

- No.39. 1141年6月から1155年6月。バックランド修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 彼(リチャード)の、フランス人やイングランド人であるすべての直属封臣、家臣。

(内容) ヒュー・ペヴェレルが土地をホスピタル騎士団に寄進したことの確認。

(証人) ウィリアム・ド・モーヴィル、ウィリアム・フィッツ・ジョン、ウィリアム・フィッツ・ラルフ、ウィリアム・ローラング、司祭 capellanus バガヌス。

(補足・確認など)

エクセタで発給された証書。寄進された土地はいずれもデヴォンにある。

ペヴェレルはプリムプトン所領群、モーヴィルはワイト島に所領のあった家門。

- No.44. 1155年6月から1162年4月。英国国立文書館にある写し。

(名宛て人) 彼(伯)の、フランス人やイングランド人であるすべての直属封臣、家臣。

(内容) 奉公人 serviens ジョンへの、クライストチャーチにある土地下賜確認。

(証人) 伯の兄弟ウィリアム・ド・ヴァーノン、ヒュー・ペヴェレル、サムソン・フォリオット、ニコラス・デ・ラウス Raus、オズバート・アルバス、ジョーダン・ティラント、司祭バガヌス、ロバート・ド・オーラ Aula、ジョン・フランク Franch', ケネボールド、ジェフリ・ド・ファレーズ Falaise、リチャード・ピストル、ロバート・フィンネ。

(補足・確認など)

証人のジョン・フランクについては、本論文「4. 考察」の(1)を参照。

ペヴェレルはプリムプトン所領群、フォリオットはプリムプトンおよびクライストチャーチ所領群、オーラはワイト島に所領のあった家門である。

ちなみに Bearman(1994)の索引を見ると、証人のケネボールドは、no. 50の証書に出るケネボールド・ル・キタリスタ Citharista つまり minstrel と同じかもしれないと、ベアマンは推測しているようだ。

- No.45. 1155年6月から1162年4月。プリムプトン修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 彼(伯)のすべての直属封臣、役人 ministris、家臣、フランス

人であれイングランド人であれ。

(内容) プリムプトン修道院と参事会員への、自分と父の寄進の確認。

(証人) なし。

(補足・確認など)

プリムプトンは1121年に、アウグスティヌス会の律修参事会修道院になった (Knowles and Hadcock(1971), 170f.)。

確認されているのは、プリムプトン、デヴォンの土地である。

このほか4通、nos.48, 51, 52, 53には「友人たち」も「アドレス」に登場している。これらについては本節の(2)でくわしく扱うことにする。

4代伯リチャード時代の1通、5代伯ウィリアム・ド・ヴァーノン時代の1通にも「友人たち」が「アドレス」に登場しているので、やはり本節の(2)でくわしく扱うことにする。

(2)「友人たち」のある証書

ここからは、名宛て人に「友人たち」が含まれているものを紹介し、考察する。

初代伯ボールドウィン時代は1通ある。

- No.20. 1141年6月から1148年頃。モナキユート修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 現在のであれ将来であれ、すべての彼(伯)の直属封臣、「友人たち」、家臣。

(内容) モナキユート修道院(サマセット)への放水路(在サマセット)の寄進。

(証人) 聖職者ジェフリ、ヒューバート・ド・ヴォ、ジェフリ・ド・フォネルズ、ジョルダン・ド・レストル。

(補足・確認など)

フォネルズはプリムプトン所領群に土地を保有していた家門である。

2代伯リチャード時代は4通である。

- No.48. 1161年4月から12月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) ウィンチェスタ司教ヘンリ(ド・ブロウ)、すべての彼(伯)

の、フランス人やイングランド人である直属封臣、家臣、「友人たち」。

(内容) ロジャ・マスケレル Maskerel がワイト島のデボーン Debourne に持っていた土地を、ロジャの要請により、クライストチャーチ修道院に寄進したことの告知。

(証人) エクセタ司教バーソロミュ、プリムプトン修道院長リチャード、他。

(補足・確認など)

ロジャ・マスケレルはワイト島におけるリチャードの封臣であった。

- No.51. 1161 年 4 月から 12 月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。

(名宛て人) ウィンチェスタ司教ヘンリ (ド・ブロワ)、すべての彼 (伯) の直属封臣、家臣、「友人たち」、フランス人であれイングランド人であれ。

(内容) クライストチャーチ修道院に、クライストチャーチの 3 カ所の合計 20 シリングの土地を下賜したと、レジナルド・ドーマール d' Aumale がジェフリ・ド・インスラと和解したときクライストチャーチに寄進した土地の告知。

(証人) 司祭バガス、聖職者アデラード、ユーク・ベヴェレル、そのほか大勢。

(補足・確認など)

この証書は、別の証書 (no.50.) と関係している。すなわち、この証書の「クライストチャーチの 3 カ所の合計 20 シリングの土地」は、no.50 によれば、タイデリンガム Tidelingham (ワイト島) の土地と交換に、レジナルド・ドーマールがジョーダン・ド・インスラの魂のために、クライストチャーチの参事会員たちに寄進したものである。そしてタイデリンガムの土地は、ワイト島のクアール修道院のものとなった。この土地はそもそも、かつて伯ボールドウィンがクアール修道院に下賜したものであった。

ドーマールとインスラはワイト島に、ベヴェレルはプリムプトン所領群に所領を持つ家門である。

- No.52. 1161 年から 1162 年 4 月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。

(名宛て人) すべての彼 (伯) の、フランス人やイングランド人である直属封臣、家臣、「友人たち」。

(内容) クライストチャーチ修道院にウォールタ・サン・オヴ・セガルと主

君ヒュー・ペヴェレルがクライストチャーチとミルフォード（ハンプシャー）の土地を寄進したことの確認。

（証人）ロバート・ド・サント・メール・エグリーズ de Ste Mère-Eglise、ウィリアム・ド・ヴァーノン、ほか。

（補足・確認など）

証人のロバート・ド・サント・メール・エグリーズは伯リチャードのおじ（先代伯の弟）。ウィリアム・ド・ヴァーノンは伯リチャードの弟で、のちの伯である。

ペヴェレルはプリムプトン所領群に所領を持つ家門。

- No.53. 1161年4月から1162年4月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。

（名宛て人）ウィンチェスタ司教ヘンリ（・ド・ブロウ）、すべての彼（伯）の直属封臣、家臣、「友人たち」、フランス人であれイングランド人であれ。

（内容）クライストチャーチ修道院にクライストチャーチの土地（ラ・ストリート）と、トスティの住むラ・ドゥン La Dune の土地を寄進したことの告知。

（証人）エクセタ司教バーソロミュ、プリムプトン修道院長リチャード、司祭パガヌス、ほか。

（補足・確認など）

「ラ・ドゥン」はベアマンによって、「うたがいなく」クライストチャーチもしくはその近郊にあった、といわれている。また彼の指摘によれば、トスティという人物がホウルデンハースト（ドーセット）近郊に土地を保有しており、そしてその土地は1155年以前にリチャード伯がクアール修道院に寄進したものであった。

4代伯リチャード時代は1通である。

- No.62. 1176年から1180年。オリジナル。

（名宛て人）すべての彼（伯）の「友人たち」、すべての彼の、フランス人やイングランド人である家臣。

（内容）チェシャーほかイングランドにあったリチャード・ド・レドヴァーズの封からウィリアム・デ・ベルシ de Berci が保有していた3騎士奉仕分の土地（そもそもリチャードの祖先ウィリアム・モーバンク Malbank からウィリアムの

父が保有)を、その息子ハムリンが兄弟ロジャに贈ったことの確認。ロジャはこの土地について伯リチャードに臣従礼をし、また2マークを支払った。

(証人) ウォールタ・ダNSTANヴィル Dunstanville、アラン・ダNSTANヴィル、アルレッド・ド・カンブレ Cumbrai、ロジャ・ド・カンブレ、ラルフ・メネウォリン、ロバート・ド・プラレス Prares、リチャード・ド・レストル、ウォールタ・マルトラヴァーズ Maltravers、ウィリアム・ド・レストル、ピーター・ド・ヴォートート Vautort、フィリップ・モーバンク、レジナルド・フィッツ・アーチボルド、アダム・ウォシェト、ウィリアム・メネウォリン Menewarin、ウィリアム・ウォシェト、ロバート・フィッツ・ピーター、ユーグ・ド・オルデライム Aldelime、ラルフ・ド・ブイヨン Buillon、ニコラス・ド・クル Crue、この証書を起草した聖職者ロジャ。

(補足・確認など)

リチャードはモーバンク家のアリスと婚約したため、同家の所領を入手していたが、結婚成立前にアリスは没し(1185年のすぐあと)、この所領は彼女の妹たちの間で分割された。

5代伯ウィリアム・ド・ヴァーノンには3通ある。

- No.68. 1175年頃から1184年11月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。

(名宛て人) 彼(ウィリアム)のたいへん愛しい甥であるボールドウィンとリチャード、フランス人やイングランド人であるすべての「友人たち」、聖母の教会のすべての息子たち。

(内容) クライストチャーチ修道院へ祖父リチャード・ド・レドヴァーズがパドルタウンの教会(ドーセット)の土地を寄進したことの確認を、甥たちに告知している。

(証人) リチャード・ド・ヴァーノン、ジェフリ・ド・インスラ、そのほか。

(補足・確認など)

甥のボールドウィンとリチャードはそれぞれ3代伯と4代伯。ベアマンによれば、証人のリチャード・ド・ヴァーノンは伯ウィリアムのいとこにあたる。

インスラはワイト島に所領を保有する家門。

- No.73. 1191年ミクルマスから1194年4月。オリジナル。

(名宛て人) すべての彼(伯)の「友人たち」、忠実な者たち。

(内容) クアール修道院(ワイト島)に、かつて修道士たちがパドルタウン Puddletown(ドーセット)のmanaに持っていた1ヴァーゲイトの土地を寄進。

(証人) セイント・ヘレン修道院(ワイト島)長ウィリアム、セイント・クロス修道院(ワイト島)長ジラルド、司祭ジョン、ペヴェレル・ド・アルジャンタン Argentan、ウィリアム・ド・アルジャンタン、ハーメル・ド・アルジャンタン、ロバート・ド・ロセル Rosell、ユーグ・ド・ホワイトフィールド Whitefield、リチャード・レイブ、グスターフ、リチャード・ウォール、ウィリアム・フィッツ・ギルバート、ジファード・ド・エヴェルシ Evercy、トマ・ド・カペル Capell'。

(補足・確認など)

セイント・ヘレンはクリュニー会、セイント・クロスはティロン会の修道院である (Knowles and Hadcock(1971), 102, 107)。

アルジャンタンはノルマンディの地名である。アルジャンタン家はワイト島に土地を保有していた。ユーグ・ド・ホワイトフィールドのホワイトフィールドもワイト島の地名である。

- No.107. 1212年から1217年9月。クライストチャーチ修道院のカーチュラリ。
(名宛て人) 彼(伯)のたいへん愛しい「友人」ドーセットの州長官、この書状が達するであろうすべての「友人たち」。

(内容) クライストチャーチ修道院へパドルタウン(ドーセット)のすべてのmanaを寄進したことの告知。

(証人) なし。

(補足・確認など)

ドーセットの州長官については本論文「4. 考察」(2)を参照。

寄進の理由が、「自分と、すべての祖先と、自分の友人たちの、魂の無事のため」とされており、ここにも「友人たち」が加えられている。

ハーワイズ(初代伯ボードウィンの娘、グロスタ伯の息子ロバートと結婚した)の関連する証書には1通ある。発給者はロバートである。

- No.111. 1141年6月から1161年。おそらく1147年10月の前。17世紀の写し。

(名宛て人) 彼 (ロバート) の現在・将来の、すべての家臣と「友人たち」。
(内容) クアール修道院へ、都市パドルタウン (ドーセット) の 1 ヴァーゲイトの土地を寄進したことの告知。

(証人) スティーヴン・ド・ビーチャム、執事リチャード、ユーグ・ド・ロジイス Logiis、ほか。

(補足・確認など)

ベアマンによれば、パドルトンは直領地のマナ demesne manor であり、ハーワイズの持参金の一部だったが、彼女の兄弟ウィリアムによって回復されているので、クアールはどうやらこの贈り物を奪われたらしい。

4. 考察

さて、以上のような証書の情報から、われわれは何を読み取ることができるだろうか。

(1) 「アドレス」のある証書

これまで筆者が分析してきた俗人諸侯の証書では、12 世紀半ばを中心に「アドレス」が多く見られ、場合によっては半数以上の証書に「アドレス」がふくまれる場合もあったが (有光 (2013)、第 10 章)、そのような傾向をレッドヴァズ家の証書の「アドレス」もだいたい持っているといえる。

そのうえで、「アドレス」が誰を指示しているのか、具体的に知る手がかりはあまりない。その中で no.21 において、スウェインやブリストウィンといった大陸系でない名前の者たちが寄進の当事者としてあげられているのが、名宛て人に「イングランド人」もしくは「英語話者」が言及される理由のひとつとして、考えられることである。

なお Bearman (1994) で具体的に「イングランド人 Anglicus」といわれている人物は、一人いる。彼、すなわちヒュー (もしくはオド)・「アングリクス」については 2 通の証書 (nos.42, 76) に記載があるが、いずれも内容は同じである。すなわち、クアール修道院 (ワイト島) の所領保有を確認する中で、かつてロバート・ルヴェル Luvell が保有していたコムプトン (ワイト島) のマナにある 1 ヴァーゲイトの土地を彼、ヒューが寄進した、というのである。Bearmann (1981, 112) はこれを 1145 年頃の寄進とし、また彼以降のコムプトン家の系譜をたどっている。のちに述べるが、ベアマンはこの家門が、1100 年以降イングランドにやってきたと述べており、そうだとするとヒュー (もし

くはオド)は大陸出身者か、その近い子孫で、「イングランド人」と呼ばれている例となる。

「フランス人」といわれている(かもしれない)人物は、二人いる。

一人は、本文で取り上げた no.44 (12 世紀半ばの、クライストチャーチに関連する証書)の証人ジョン・フランク Franch' である。「フランク」Franch' は「フランス人 francus」のことであろうか? Bearmann (1994) は索引で Franch' をそのまま採用している。

もう一人は no.114、1193 年頃から 1204 年頃の証書で、伯ウィリアムがドーセットにある複数のマナを娘と孫とに贈与している証書の証人の一人、ロバート・フレンチ(もしくはロベール・フランセと読むべきか) Roberto Franceis である。Franceis は明らかにフランス語である。

彼らについてわかる情報は以上である。12 世紀半ばから後半にかけて、「イングランド人」「フランス人」と呼ばれる人々が、ワイト島やドーセットにいたことが確認できた。しかしその意味するところをいっそう具体的に理解するには、もう少し背景についての情報が必要である。

(2)「友人たち」を含む証書について

3. (2) で「友人たち」をふくむ証書を検討したとき、印象に残るのは、ワイト島になんらかのかたちに関わりを持つものが多いことである。内容や証人に、ワイト島とのかかわりが見られるものは以下の通りである。

No.20. 証人のヒューバート・ド・ヴォは、ワイト島のクアール修道院創建時にデヴォンの土地を寄進している (no.17)。

No.48. ワイト島の土地の寄進を扱っている。

No.51. 紛争当事者として名前が出てくるレジナルド・ドーマールとジェフリ・ド・インスラはともに、ワイト島に所領を保有しており、証書に記された寄進にも、ワイト島およびこの島のクアール修道院が関連していた。

No.53. 証書で寄進が確認された土地の住人トスティについて、クアール修道院の所領と彼の保有する土地との関係が示唆されていた。

No.68. 証人としてあらわれるジェフリ・ド・インスラは、ワイト島に所領を持つ。

No.73. ワイト島のクアール修道院への寄進を証している。

No.111. No.73 と同様。

3. (2) で検討した 10 通のうち、以上の 7 通に、ワイト島とのかかわりがなんらかのかたちで指摘できるのである。

もっともこれで、「友人たち」とワイト島との強固な関係が、証明できたわけではない。

たとえば、3. (1) で検討した 7 通の証書のうち、内容や証人に、ワイト島とのかかわりが見られるものは、以下の通りである。

No.15. 確認されている所領はワイト島のものもふくまれる。また証人のひとりウィリアム・ド・モーヴィルは、ワイト島に所領を保有するモーヴィル家の一員である。

No.21. ワイト島のクアール修道院への寄進を告知している。証人の一人ブライアン・ド・インスラは、ワイト島のド・インスラ家の一員である。

No.32. ワイト島の土地に関わる証書であり、名宛て人も「島の州長官、島のすべての直属封臣」である。

No.39. 証人のひとりウィリアム・ド・モーヴィルは、すぐ上 (no.15) に記したように、ワイト島に所領を保有するモーヴィル家の一員である。

No.44. 証人のひとりロバート・ド・オーラは、ワイト島に所領を保有するド・オーラ家の一員である。

このように、3. (1) で検討した 7 通のうち、以上の 5 通に、ワイト島とのかかわりがなんらかのかたちで指摘できるのである。とくに no.32 は、もっぱらワイト島にかかわる証書といえるが、「友人たち」はあらわれない。であるので、「友人たち」がふくまれる証書はワイト島に関連するものが多いが、ワイト島に関連するから「友人たち」がふくまれるとは必ずしもいえない、と述べておくのが、妥当な評言であろう。

そのうえで、ワイト島について、ここでひとつ確認しておきたいことがある。少し長くなるが、ベアマンがレッドヴァズ家の、ワイト島家臣団について分析した結論部分である。

「この概観が明らかに確立しているのは、ワイト島におけるレッドヴァズ家とその主要な土地保有者たちとの、長期にわたる密接な関係である。いくつか (の家門) はリチャード・ド・レッドヴァズがワイト島にやってきたときすでにここに定着しており、それはたとえばフィッツ・ストール家がそうであり、お

そらくインストラ家もそうだった（なおインストラ家はフィッツ・ストール家から出ているようだ(Bearman (1981), 91)。モーヴィル家、オグランダー家、クラモーガン家のような、そのほかの（家門）はほとんど確実に、リチャード・ド・レッドヴァズとともにイングランドへ1100年にやってきた。新しい所領から名を取った者たち、たとえばコムプトン…のような者たちは、リチャードのノルマン人従者としての奉仕に対する報酬として、ひとつふたつのマナのみを受封された、より小規模の従者であった。ワイト島の封建構造もまたたいへんコンパクトであった。（島でレッドヴァズ家の）カリスブルック所領群から保有されているのでないマナは2つしかなく、またモーヴィル家やドーマール家のような家門は他所で国王から直接マナを保有していたが、他の家門はほかの関わり合いはなかった。ワイト島の直属封臣層は、こうした家門の長からなるが、こうして密に関係を持った一団であり、数世代にわたりレッドヴァズ家宮廷の構成員であり、また同様に、しばしばなんらかの行政上の役割をもってレッドヴァズ家に仕えていた。…ここで、リチャード・ド・レッドヴァズは、偶然であれもくろんだのであれ、単一の主君に対する彼らの完全な忠誠を永続させたのだ、仲間意識 the spirit of comradeship と同様に」(Bearmann (1981), 124)。

ベアマンはこのように述べて、ワイト島のレッドヴァズ家と家臣団の特殊性を指摘している。ここでわれわれの議論にとって大切なのはもちろん、彼が「仲間意識」に言及していることである。ベアマンが何を根拠にここでこのような指摘をしているのかは、必ずしも明確には述べられていない。しかし、彼の指摘と、われわれが注目してきた、証書中の「友人たち」ということばの存在とは、たしかに呼応するところがある。

なお、証書中でただ一人、「友人」と単数形で呼ばれている人物がいる。No. 107 の、5代伯ウィリアム・ド・ヴァーノンの「たいへん愛しい『友人』ドーセットの州長官」である。この証書は1212年から1217年9月の間に発給されているが、*Lists and Indexes, no. 9, List of sheriffs for England and Wales, from the earliest times to A.D. 1831, compiled from documents in the Public Record Office, New York, Kraus Reprint, 1963* (<https://archive.org/details/listofsheriffsfo00newy/page/122/mode/1up>, 2020年8月10日最終閲覧)によると、この間ドーチェスタ（とサマセット）の州長官だった人物は7名、ノーサンバランドの大助祭マスター・リチャード・ド・マリスコ Master Richard de Marisco、ロジャ・ド・ピールトン Roger de Pealton、ウィリアム・ド・ヘア

カート William de Harecurt、リチャード・ピパード Richard Pipard、リチャード・ド・ヘアカート Richard de Harecurt、ラルフ・ド・ブレイ Ralph de Bray、ピータ・ド・モーレイあるいはマロ・ラク Peter de Maulay or Malo Lacu である。しかしこの中で、別の証書にあらわれるのはただ一人、リチャード・ピパードのみであり (no. 120)、そこでは「友人」とは言われておらず、敬称「殿 dominus」が付されているのみである。であるので、現存する史料から、5 代伯とドーセット州長官との関係をこれ以上詰めることはできない。

5. 結論

最後に今回の分析でわかったことを、簡潔にふりかえっておこう。

これまで筆者が分析してきた俗人諸侯の証書のような「アドレス」の使用頻度を、レドヴァズ家の証書の「アドレス」もだいたい持っている。

そのうえで、「アドレス」が誰を指示しているのか、具体的に知る手がかりはあまりないが、関係があるかもしれないいくつかの個人名 (スウェインやブリストウィン (no.21)、ジョン・フランク (no. 44)。また「アドレス」のない証書だが、ヒュー (もしくはオド)・アングリクス (nos. 42, 76)、ロバート・フレンチ (no. 114) の例を知ることができた。ヒュー (もしくはオド) は、大陸出身者か、その近い子孫で「イングランド人」と呼ばれている例でもある。

また「友人たち」がふくまれる証書はワイト島に関連するものが多く (もっとも、ワイト島に関連するから「友人たち」がふくまれるとは必ずしもいえない)、ワイト島のレドヴァズ家と家臣団との、他所とは違う密接な人間関係と関係があるかもしれない。

レドヴァズ家と「友人たち」を考えるわれわれの考察は、今回はここでひとまず終えねばならない。今後の研究の方向としては、他の諸侯などの証書における「友人たち」の例を調査し、他にも見られるのか、それともワイト島、レドヴァズ家の場合が特殊なのかを見定めることが考えられる。また証書以外の「友人たち」の用例と照らし合わせてみることや、今回は 12 世紀に主に注目したが、その前後の時代におけるワイト島社会を考察することも、また必要であらう。

(言及・引用文献)

- 有光秀行 (2013) 『中世ブリテン諸島史研究——ネーション意識の諸相——』 刀水書房
- Bates, David (2013) *The Normans and Empire*, OUP.
- Bearman, Robert (1981) Charters of the Redvers family and the earldom of Devon in the twelfth century, unpublished Ph. D thesis, London University.
- Bearman, Robert (1994) *Charters of the Redvers family and the earldom of Devon 1090-1217*, Devon and Cornwall Record Society.
- Bearman, Robert (2004) Revières [Reviere, Redvers], Baldwin de, earl of Devon, *Oxford Dictionary of National Biography*.
- Knowles, David and R. N. Hadcock (1971) *Medieval Religious Houses: England and Wales*, Harlow, Longman, 2nd ed.
- Meddings, John (2000) 'Friendship among the aristocracy in Anglo-Norman England', *Anglo-Norman Studies*, XXII, 187-204.
- 中村敦子 (2015) 『『ノルマン帝国』後の40年：貴族層を中心としたアングロ・ノルマン史研究の現在の動向』、『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』30

‘Friends’ of the earls of Devon and the Redvers family in the 12th century

Hideyuki ARIMITSU

The Redvers family acquired the honours of Carisbrook, Christchurch and Plympton in England in the reign of Henry I, and afterwards, also the title of the earl of Devon. Many of their charters contain not only *Francis et Anglis* (‘to the French and the English’ or ‘to those who speak French and those who speak English’) but also *amicis*, ‘to the friends’, in their address part. *Amicis* is a rather rare word in the phraseology of the charters in the 12th century. In this paper I examine the frequency and the contexts in which these words were used, and look into some examples of *Anglus*, *Francus* and *amicus*. Many charters with *amicis* have some relationships with the Isle of Wight, the most important part of the Redvers estates. Previously Robert Bearman suggested that ‘the Island baronage ...was... a closely-knit body, members of the Redvers’ court for generations’ and that they had ‘the spirit of comradeship’. Such special relationships within the Isle may explain the similarly special address *amicis*.